

実習生が実感した子どものからだと心のおかしさ ～幼稚園教育実習での子どもたちとの関わりから～

Practice Students' Realizations of Children's Physical and Mental Troubles — From their Relationship with Children during Kindergarten Practice —

(2013年3月31日受理)

土田 豊 野井 真吾*
Yutaka Toda Shingo Noi

Key words : 幼稚園教育実習, 実感, 前頭葉機能, 免疫機能

【要 約】

現代の子どもたちは、日常生活の便利さや快適さと引き換えに、自律神経の乱れや前頭葉機能の発達不全といった、病気とは言い難いからだと心のおかしさを抱えている。一方、卒業後すぐに保育者としてそのような子どもたちと接することになる学生には、子どものおかしさにいち早く気づく感性が求められる。本研究では、1カ月の教育実習期間で学生がどのようなおかしさに気づき、どのようなおかしさが気づきにくいのかを全国の幼稚園教諭の実感調査と比較し、明らかにすることを目的とした。その結果、前頭葉機能に起因したおかしさは、比較的気づきやすいが、免疫機能に起因したおかしさには、気づきにくいことが明らかとなった。また、外遊びをよくしている園の子どもの方が、おかしさの実感項目数が有意に少ないことが示唆された。

1. はじめに

戦後の日本における文化的水準は、高度経済成長を経て飛躍的に上昇し、世界的にも豊かな暮らしができる経済大国へと発展した¹⁾。その様子は、子どもたちの身長・体重等の体格が、漸増的に増加したことからも推察することができる。一方、学校で定期的に実施される健康診断においては、「う歯」と「裸眼視力1.0未満」が今日的な健康問題ととらえることはできるが、そのほかは意外と確認されない²⁾。しかし、日常的に頭痛や腹痛、倦怠感など不定愁訴を訴える子どもたちが多く確認されるようになってきた。宮本³⁾は、不定愁訴は小児でも決して稀なものではないことを指摘している。このように、小児生活習慣病や不登校、自殺の問題は益々深刻化しており、文化的な生活水準の上昇が新たな問題を引き起こしていると考えられる。

ところで、NHKと日本体育大学体育研究所とが共同で

行った「子どものからだの調査」による結果が、1978年10月9日NHK特集「警告！子どものからだは触まれている」として放映され、大きな反響を生んだ。この調査や放映をきっかけに子どもの「からだのおかしさ」に対する国民の心配が一気に高まったと言われている⁴⁾。この調査は、全国の保育・教育現場で子どもたちと関わりのある方々の実感を、調査項目に該当する子どもが「最近増えている」のか、「変わらない」のか、「減っている」のか、「いない」のか、「わからない」のかを選択回答する形式で実施されている。1978年の調査を皮切りにほぼ5年間隔で現在（2010年調査が最新）も継続されている。調査用紙は、乳・幼児用と児童・生徒用に分かれており、調査項目も対象に合わせた内容となっている。（資料＜乳幼児用＞参照）

この調査結果や番組放映を受ける形で、翌年(1979年)、子どものからだと心に関する問題について議論する場として正木らによって設立された団体が「子どものからだ

*日本体育大学准教授

と心・連絡会議」である⁴⁾。以降、30年以上にわたって保育・教育現場の教職員や大学教員、学校医、保健師など子どもに関わる様々な職種の方が一同に会し、知恵を出し合いながら子どものからだと心の現状分析並びに問題解決に向けた議論を重ねている。その結果、改善が確認できるおかしさがある一方で、新たなおかしさが追加されたり、益々おかしさが増大したりするなど深刻さを増しているのが現状である。

2. 問題の所在

「子どものからだの調査2010」⁴⁾より

全国の幼稚園・保育所・小学校・中学校・高等学校に通う児童生徒を対象として実施された「子どものからだの調査2010」において“最近増えている”という実感の回答率・ワースト10（以下「実感調査2010」とする）を表-1に示した。全ての年齢段階で「アレルギー」が、

加えて幼児期の子どもたちは「ぜんそく」と「皮膚がカサカサする（アトピー）」が現場の実感として多い様子がうかがえる。このような傾向はここ数十年続いており、免疫機能に起因した問題が、現代の子どもたちを代表するおかしさの1つとなっていることが推察される。

また、「すぐ『疲れた』という」の実感は、子どものからだの調査開始のきっかけともなった「遠足で最後まで歩けない子が現れた」現象の裏付けともいえる実感であり、調査開始以来、常にワースト10にランクインしているおかしさである。この問題に関しては、当初子どもたちの体力（特に持久力）の低下が招いたおかしさではないかと考えられ、各教育現場で子どもの「体力づくり」が積極的に実施された。その取り組みにより文部科学省が実施する新体力テストにおける持久力の指標<シャトルラン>の成績は、男女とも1998年以降上昇し続けている（図-1）。この結果が示すように、教育現場における「体力づくり」の取り組みは、子どもたちの持久力の向

表-1 “最近増えている”という実感の回答率・ワースト10（文献4より引用）

保育所 (n=90)		幼稚園 (n=105)		小学校 (n=329)		中学校 (n=210)		高等学校 (n=55)			
1	皮膚がかさかさ	65.6	1	アレルギー	72.4	1	アレルギー	78.1	1	首・肩のこり	74.5
2	すぐ「疲れた」という	63.3	2	すぐ「疲れた」という	65.7	2	授業中、じっとしていない	72.3	2	うつめ傾向	72.7
3	保育中、じっとしていない	60.0	3	背中ぐにや	63.8	3	背中ぐにや	69.3	2	すぐ「疲れた」という	70.0
3	背中ぐにや	60.0	4	ぜんそく	62.9	4	視力が低い	67.2	4	夜、眠れない	69.0
3	アレルギー	60.0	5	自閉的傾向	61.9	5	すぐ「疲れた」という	63.5	5	不登校	68.1
6	朝、起きられない	55.6	6	皮膚がかさかさ	61.0	5	絶えず何かをいじっている	62.6	6	腰痛	63.8
7	夜、眠れない	53.3	7	保育中、じっとしていない	58.1	7	平熱36度未満	60.2	7	腹痛・頭痛を訴える	62.9
7	ぜんそく	53.3	8	発音が気になる	53.3	7	症状説明できない	60.2	7	うつめ傾向	62.9
9	体が硬い	47.8	9	床にすぐに寝転がる	50.5	9	転んで手が出ない	58.4	9	首・肩のこり	61.9
10	奇声を発する	45.6	10	転んで手が出ない	46.7	10	夜、眠れない	57.4	9	自閉的傾向	61.9
10	自閉的傾向	45.6							10	自閉的傾向	54.5

※表中の数値は%を示す。

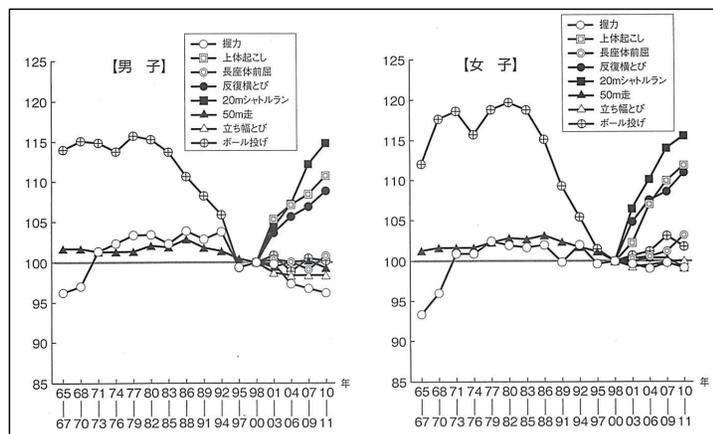


図-1 新体力テスト項目別平均値の年次推移 [11歳]
（文部科学省『体力・運動能力調査報告書』より）（文献5より引用）

上に対して一定の成果を得たと言えるが、保育・教育現場における「すぐ『疲れた』という」子が最近増えているの実感の解消にはつながっておらず、現在まで持ち越されている。このような状況を鑑み、近年では表-2に示すように「すぐ『疲れた』という」事象の原因は、不定愁訴を訴える子どもが増加している³⁾ことに象徴される自律神経機能の乱れや、物事に対して意欲的に取り組むことができないあるいは、できにくくなっている前頭葉機能に起因した問題ではないかと考えられるようになってきた。

1978年から継続的に実施されてきた「子どものからだの実感調査」ではあるが、回を重ねるごとに子

表-2 子どもの“からだのおかしさ”の事象、ならびにその事象から予想される問題（実態）と関連するからだの機能（文献5より引用）

事象	事象から予想される問題(実態)	事象と関連するからだの機能											
		前頭葉機能	感覚・記憶機能	防御反射機能	自律神経機能	免疫機能	内分泌機能	体温調節機能	睡眠・覚醒機能	運動神経機能	視機能	口腔機能	筋機能
保育・授業中じっとしていない	集中力の欠如	○							○				
絶えず何かをいじっている	不安・緊張傾向	○											
すぐ「疲れた」と言う	意欲・関心の低下、疲労・体調不良	○			○								
朝、起きられない	睡眠習慣の未確立・乱れ							○					
夜、眠れない	睡眠習慣の未確立・乱れ							○					
転んで手が出ない	防御反射・反応の鈍化		○	○					○				
背中ぐにや	意欲・関心の低下、疲労・体調不良、抗重力筋の緊張不足、体幹筋力の低下	○			○	○	○	○					○
平熱36度未満	体温調節不良				○	○	○	○					
手足が冷たい	体温調節不良				○	○	○						
奇声を発する	不安・緊張傾向、大脳新皮質の機能不全	○											
腹痛・頭痛	不安・緊張傾向、疲労・体調不良	○			○								
症状説明できない	からだに関する関心・知識不足	○	○										
首・肩こり	不安・緊張傾向、疲労・体調不良	○			○								
発音が気になる	口腔の発育・発達不全											○	
体が硬い	柔軟性の低下												○
アレルギー	免疫異常					○							
皮膚がカサカサ	免疫異常					○							
ぜんそく	免疫異常					○							
自閉的傾向	大脳新皮質の機能不全	○											
うつの傾向	大脳新皮質の機能不全、不安・緊張傾向、疲労・体調不良	○			○	○							
視力が低い	視機能の発達不全・低下									○			
腰痛	体幹筋力の低下												○
不登校	意欲・関心の低下、疲労・体調不良	○			○								
床にすぐに寝転がる	意欲・関心の低下、疲労・体調不良、体幹筋力の低下	○			○								○

どものからだと心の問題は深刻さを増している。また、本調査が、保育・教育現場の保育者や教育者の実感に基づいて展開されている性質上、保育者や教育者には子どもの変化に気づく感性が強く求められるといえよう。子どもの異変に早く気づくことが早期の解決につながると同時に、さらなる悪化を食い止めることにつながるとも考えられる。

一方で、保育者や教員を養成する教育課程においては、現代の子どもたちが抱えている問題を理解しつつ、子どもたちの異変にいち早く気づき対応できる感性を身につけていくことが急務であると考えられる。

3. 目 的

本研究では、大学卒業後に保育現場で子どもたちと向き合うことになる保育学科の学生が、1カ月間の幼稚園教育実習で、子どもたちと接する中でどのようなおかしさに気づくことができたのか、逆にどのようなおかしさが気づきにくいのかを「子どものからだの調査2010—幼稚園—（以下＜実感調査2010—幼稚園—＞とする）」の結果と比較、検討することを目的とする。

4. 方 法

[調査対象]

2012年度幼稚園教育実習（教育実習期間：2012年10月22日～11月16日）を実施した本学短期大学生 116名

[調査期日]

2012年11月19日・22日

[調査方法並びに分析]

本研究では、2012年度幼稚園教育実習終了直後の体育講義授業内に、「子どものからだの調査2010」の乳幼児用調査用紙（資料参照）を用いて、各項目に該当する子どもが、「いた」「いなかった」「わからない」の三択形式で回答を求めた。その後、調査用紙を回収・集計し、実感調査2010－幼稚園－の結果と比較検討した。

併せて、教育実習を通しての実感を記述式で求め、記述内容から現代の子どもたちが抱えている問題の傾向と対策を探った。

5. 結果と考察

5-1 実感調査の比較より

表-3は、「子どものからだの調査2010」の乳幼児用調査56項目に2012年度幼稚園実習を終えた学生が、「いる」「いない」「わからない」の三択で回答した結果（以下＜実感調査2012－実習生－とする）である。この表が示すように、「3. 保育中じっとしていない」「28. 奇声を発する」「36. 発音の仕方が気になる」等、子どもたちとの毎日の接触で体感しやすい項目に対しては「いる」の回答割合が高くなる傾向が見られた。対して、「25. 平熱36度未満」「26. 平熱37度以上」「51. 就寝時膝など関節痛で不眠」等、幼稚園というよりは家庭で多く見られると予想できる項目を中心に「わからない」と回答する割合が高くなっていった。これらのことより、子どもたちの行動として表出しやすい事象は、実習生という立場であっても確認することができるが、家庭での生活に関する事象や、季節性のある事象については「わからない」の回答率が高くなる傾向が示された。

表-4は、＜実感調査2010－幼稚園－＞と＜実感調査2012－実習生－＞のワースト10を比較したものである。実習生が実感したおかしさのワースト10のうち「保育中

表-3 <実感調査2012－実習生－>回答結果

No.	項 目	いる	いない	わからない
1	朝からあくび	46.6	47.4	6.0
2	保育中目がトロン	38.8	52.6	8.6
3	保育中じっとしていない	85.2	10.4	4.3
4	絶えず何かをいじっている	50.4	33.9	15.7
5	ポーンとして何もしていない	20.9	71.3	7.8
6	あまり汗をかかない	24.3	20.0	55.7
7	すぐ『疲れた』という	51.7	34.5	13.8
8	朝なかなか起きられない	24.1	11.2	64.7
9	夜なかなか眠れない	7.8	11.2	81.0
10	転んで手が出ない	14.7	47.4	37.9
11	まばたきが鈍い	5.2	41.4	53.4
12	ボールが目にあたる	10.3	44.0	45.7
13	椅子に座っている時背中ぐにゃ	53.0	30.4	16.5
14	氣をつけて腹が前に出っ張っている	20.7	38.8	40.5
15	肩甲骨の高さや出っ張りが不対照	7.8	26.7	65.5
16	肩甲骨の大きさに左右差あり	2.6	20.7	76.7
17	背筋おかしい	5.2	36.2	58.6
18	爪先立ち歩き	11.2	63.8	25.0
19	つまずいでよく転ぶ	26.7	54.3	19.0
20	内またのためよく転ぶ	3.4	61.2	35.3
21	すぐ疲れて歩けなくなる	15.5	69.0	15.5
22	まっすぐ走れない	11.2	52.6	36.2
23	のぼり棒で足裏を使えない	23.3	25.9	50.9
24	力の加減が下手	24.1	30.2	45.7
25	平熱36度未満	4.3	5.2	90.5
26	平熱37度以上	1.7	5.2	93.1
27	手足が冷たい	50.9	19.0	30.2
28	奇声を発する	62.1	25.0	12.9
29	指吸い	36.2	51.7	12.1
30	爪かみ	28.4	57.8	13.8
31	よく腹痛・頭痛を訴える	29.3	57.8	12.9
32	咀嚼力弱い	26.4	44.8	38.8
33	口で呼吸している	28.4	27.6	44.0
34	自分で症状を説明できない	30.2	42.2	27.6
35	肩がこっている	2.6	31.9	65.5
36	発音の仕方が気になる	60.3	23.3	16.4
37	歯並びが悪い	29.3	33.6	37.1
38	歯ぐきの色がおかしい	4.3	46.6	49.1
39	聴力が弱い	10.3	48.3	41.4
40	体が硬い	31.0	25.9	43.1
41	異常と思われる肥満児	10.3	72.4	17.2
42	異常と思われる痩身児	9.5	70.7	19.8
43	鼻炎でプールに入れない	1.7	16.4	81.9
44	鼻血が出やすい	15.5	40.5	44.0
45	アレルギー性疾患	24.1	21.6	54.3
46	皮膚がかさかさ	32.8	31.9	35.3
47	ぜんそく	22.4	27.6	50.0
48	胸郭異常	1.7	33.6	64.7
49	ちょっとしたことで骨折する	2.6	43.1	54.3
50	骨折しても痛みを訴えない	0.9	32.8	66.4
51	就寝時膝など関節痛で不眠	0.0	13.8	86.2
52	成長痛	0.0	22.4	77.6
53	自閉的傾向がある	24.1	28.5	47.4
54	床にすぐ寝ころぶ	49.1	28.4	22.4
55	あまり水分をとらない	25.0	44.0	31.0
56	あまりトイレに行かない	31.9	44.0	24.1

※表中の数値は%を示す。

じっとしていない」「発音が気になる」「背中ぐにゃ」「すぐ『疲れた』という」「床にすぐに寝転がる」は、幼稚園教諭の実感ワースト10にも含まれており、実習生の実感がある程度保育現場の実感と合致したと言える。

その一方で、幼稚園教諭が実感している「アレルギー」「ぜんそく」「皮膚がかさかさ」に関しては、実習生のワースト10には含まれていなかった。このような結果は、これらのおかしさが身体のどのような機能に起因したおかしさ

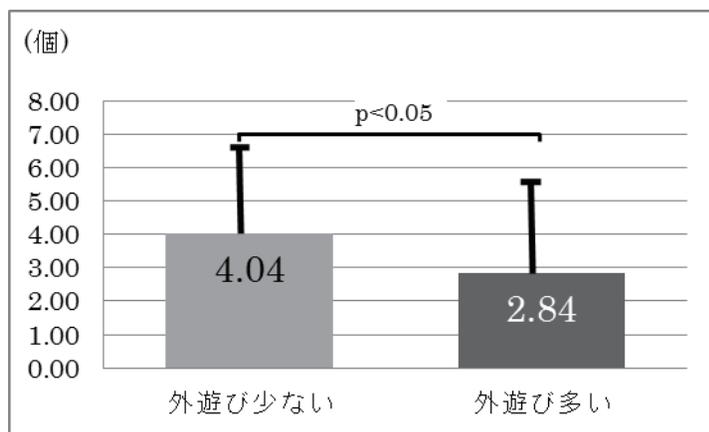


図-2 外遊びの多寡とおかしさ実感項目数の平均

較したところ、図-2に示したように、外遊びが少ない園のグループは 4.04 ± 3.03 個、外遊びが多い園のグループは 2.84 ± 3.03 と、外遊びに積極的な園の方がおかしさ実感項目が有意に少ない ($t = 2.069$, $p < .05$) ことが確認された。この結果を一概に外遊びだけの影響と断定することは早計だが、1つの要因として外遊びの多寡が子どものからだのおかしさを軽減することに関係していると推察することができる。

6. 今後の課題

本研究を通して、短期間の子どもたちとの接触では、免疫機能に起因したおかしさに気づきにくいことが明らかとなった。しかし、「アレルギー」や「ぜんそく」の問題は、命に直結する重大な事象でもあることから決して看過できない。今後は、これらのおかしさが現代の子どもたちを代表するおかしさであること、短期間の接触では気づきにくいことを念頭に置き、養成課程における指導カリキュラムを検討していく必要がある。

また、からだと心の問題が議論されるようになって30年以上が経つことを考えると、学生たち自身も何らかのからだと心のおかしさを抱えたまま成長していることが予想できる。そのため、まず学生自身がからだと心の問題を自分の問題と捉え、実感できる機会を設けていくことが必要だと考える。そのことを踏まえた上で、将来保育者・教育者となる学生には、子どものからだと心のおかしさに気づくことのできる感性を高められるカリキュ

ラムを検討していく必要もある。

その一方で、本研究の対象とした実習生（学生）という存在は、子どもたちの様子や園の方針を客観的に評価することができる立場であることから、実習生の実感を一つの評価基準と捉え、データを蓄積しながらその傾向を探ることが、子どものからだのおかしさの解決や、子どもたちにとって望ましい保育環境を見出すことにつながると考える。また、得られた結果を実習生にフィードバックすることで、保育者・教育者に求められる視点を養うことにもつながっていくと考える。

【引用文献】

- 1) 文部科学省：幼児期運動指針ガイドブック（2012）
- 2) 野井真吾：最近の子どもにおける健康・生活課題. 日本臨床スポーツ医学会誌. (2012) 20(2), 273-276
- 3) 宮本信也：不定愁訴に対する心身医学的アプローチ. 日本小児保健研究. (2005) 59, 1-7
- 4) 阿部茂明・野井真吾：“実感”が語る「からだのおかしさ」. 子どものからだと心白書2010. (2010) 36-39
- 5) 子どものからだと心連絡会議：子どものからだと心白書2012. ブックハウス・エイチディ. (2012)

資料＜乳・幼児用＞

「子どものからだの調査 2010」
調査用紙

☆基本事項 *後日報告書を送らせていただきますので、回答者名・学校名・所在地をご記入ください。

① 回答者名		② 1. 園長 2. 幼稚園教諭 職名 3. 保育士 4. その他()	
③ 国立・公立 私立・その他()	④ 保育所・ 幼稚園名	⑤ 電話 ()	
⑥ 〒 所在地 都・道・府・県			
⑦ 男児 女児 子どもの総数 名 名			
⑧ 1. 市街地(ビル街、商店街) 2. 市街地周辺の住宅地域 地域環境 3. 工場が多い地域 4. 農・漁・林業地域			

子どものからだの調査 2010（乳幼児用）

以下の項目について、“実感”で該当する欄の番号に○をつけてください。

からだの活動性		最近ふえている	変わらない	減っている	いない	わからない
1	朝からあくびをする子	1	2	3	4	5
2	保育中、目がトロンとしている子	1	2	3	4	5
3	保育中、じっとしていない子	1	2	3	4	5
4	絶えず何かをいじっている子	1	2	3	4	5
5	自由時間の時など、ボーッと何もしていない子	1	2	3	4	5
6	あまり汗をかかない子	1	2	3	4	5
7	すぐに「疲れた」という子	1	2	3	4	5
8	朝、なかなか起きられない子	1	2	3	4	5
9	夜、なかなか眠れない子	1	2	3	4	5

からだの防御性		最近ふえている	変わらない	減っている	いない	わからない
10	転んで手が出ない子	1	2	3	4	5
11	まばたきがにぶい子	1	2	3	4	5
12	ボールが目にあたる子	1	2	3	4	5

直立姿勢や動作		最近ふえている	変わらない	減っている	いない	わからない
13	椅子に座っている時、背もたれによりかかったり、ほおづえをついたりして、ぐにやぐにやになる子	1	2	3	4	5
14	「気をつけ」の姿勢の時、腹が前に出っばっている子	1	2	3	4	5
15	まっすぐな姿勢をした時、肩甲骨の左右の高さや出っばり具合が対照的でない子	1	2	3	4	5
16	肩甲骨の左右の大きさに違いがある子	1	2	3	4	5
17	脊柱異常とまではいかななくても、背筋がおかしい子	1	2	3	4	5
18	つま先立ち歩きの子	1	2	3	4	5
19	つまずいてよく転ぶ子	1	2	3	4	5
20	内またのためによく転ぶ子	1	2	3	4	5
21	すぐ疲れて歩けなくなる子	1	2	3	4	5
22	まっすぐに走れない子	1	2	3	4	5
23	棒のぼりで足うらを使えない子	1	2	3	4	5
24	力が入りすぎて、ちょうどよい力で動作ができない子	1	2	3	4	5

病気・けが・その他		最近ふえている	変わらない	減っている	いない	わからない
25	平熱が 36 度未満の子	1	2	3	4	5
26	平熱が 37 度以上の子	1	2	3	4	5
27	手足が冷たい子	1	2	3	4	5
28	奇声を発する子	1	2	3	4	5
29	指吸いの子	1	2	3	4	5
30	爪かみの子	1	2	3	4	5
31	よく腹痛や頭痛を訴えてくる子	1	2	3	4	5

32	そしゃく力が弱く、食べ物を飲み込んでしまう子	1	2	3	4	5
33	口で呼吸している子	1	2	3	4	5
34	自分で症状を説明できない子	1	2	3	4	5
35	首すじがはったり、肩がこっている子	1	2	3	4	5
36	発音の仕方が気になる子	1	2	3	4	5
37	歯ならびの悪い子	1	2	3	4	5
38	歯ぐきの色がおかしい子	1	2	3	4	5
39	聴力の弱い子	1	2	3	4	5
40	体が硬い子	1	2	3	4	5
41	異常と思われる肥満の子	1	2	3	4	5
42	異常と思われる痩身（やせ）の子	1	2	3	4	5
43	鼻炎でプールに入れない子	1	2	3	4	5
44	鼻血が出やすい子	1	2	3	4	5
45	アレルギー性疾患の子	1	2	3	4	5
46	皮膚がかさかさの子	1	2	3	4	5
47	ぜんそくの子	1	2	3	4	5
48	胸郭異常の子	1	2	3	4	5
49	ちょっとしたことで骨折する子	1	2	3	4	5
50	骨折しても痛みを訴えない子	1	2	3	4	5
51	夜寝ている時、膝などの関節が痛くて眠れない子	1	2	3	4	5
52	オスグッド・シュラッテル病（膝の骨の異常発達で痛む）の子	1	2	3	4	5
53	自閉的傾向がある子	1	2	3	4	5
54	床にすぐ寝転がる子	1	2	3	4	5
55	あまり水分をとらない子	1	2	3	4	5
56	あまりトイレに行かない子	1	2	3	4	5

☆実習中に会った子どもたちの様子や、自分たちが子どもたちのことの違いなど気づいたことを書きましょう。
